

コンピテンシーの  
道程

# 職人の技

シリーズ・44

大澤 健吾 さん  
鼈甲職人

伝統とは守っていくものではなく、  
時代と共に変わり続けること

工芸品や装飾品の材料として、古くから利用されている<sup>べっこう</sup>鼈甲。  
亀の甲羅という希少性の高い素材を幾重にも張り合わせて作られる鼈甲は、  
独特の色合いが日本人の肌に合うとされ、眼鏡フレームとしても愛用されてきた。  
鼈甲の奥行き深い光沢には、伝統の技術が息づいている。



「<sup>べっこう</sup>鼈甲職人になりたいと思ったことは一度もなかった。父親の仕事を手伝っているうちに、気がつけば自然と家業を受け継ぎ、鼈甲職人の道を歩んでいた」——東京・千駄木に店を構える、眼鏡フレームを中心とした鼈甲素材の商品を扱う大澤鼈甲。その二代目として、大澤健吾さんは日々鼈甲が持つ可能性を追求している。

「鼈甲は東京都の伝統工芸ですが、私自身は伝統というものをそれほど強く意識していません。扱っている素材が、たまたま亀の甲羅という珍しいものだっただけだと思っています。特に鼈甲眼鏡は、伝統工芸品である前に日常的に使う工業製品です。今という時代に合ったものを作り続けるということを常に心掛けています」

鼈甲は、赤道付近に生息するウミガメの一種であるタイマイの甲羅を原料とした加工工芸品だ。半透明で黄褐色鼈甲の色合いは、日本人の肌の色に合うと言われ、古くから櫛やかんざしの素材として親しまれてきた。眼鏡フレームの素材としても江戸時代頃から扱われるようになり、徳川家康が鼈甲の眼鏡を使っていたことでも知られる。

「いろいろな眼鏡を試された後に、鼈甲の眼鏡をかけたと言ってお店に来られる方が多くいらっしゃいます。鼈甲の成分は大半がタンパク質なので肌にも優しく、たとえ一部が破損しても新しい鼈甲を次ぎあわせて修理することができます。定期的にメンテナンスしながら、長く大事に使いたいというお客様がほとんどです」

鼈甲は、タイマイの甲羅から切り出した素材を何枚も重ね合わせ、熱によって圧着して作られる。その後、貼り合わせた鼈甲を少しずつ削って形を整えていく。大澤鼈甲では、この工程の一部に、CAD/CAM（コンピュータ支援設計・製造）を用いている。

「鼈甲を張りあわせる作業は、感覚的な部分が重要になるので、どうしても手作業でなければできません。しかし、張り合わせて固めた鼈甲を削っていく作業に切削機械を取り入れることで、手作業では不可能だった形状の眼鏡フレームが作れるようになりました」

伝統的な鼈甲の眼鏡フレーム作りに機械を使うことで大澤さんが創り出したのが、鼈甲とチタンの二重構造になった眼鏡フレーム「KUAI」シリーズだ。KUAIはその斬新な構造と高度な技術で「アイウェア・オブ・ザ・イヤー2011」のラグジュアリー部門でグランプリを受賞するなど、

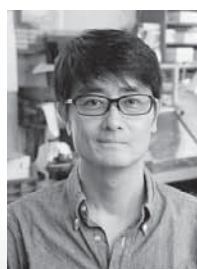
大きな注目を集めている。

「昔は、一人前の鼈甲職人になるには10年間の下積みが必要だと言われていました。今では機械を取り入れるなど方法を変えることで、熟練の職人でなくても鼈甲を扱えるようになりました。伝統的な技術を踏襲するだけではなく、今の技術を取り入れて、より良いものを提供することが、私たち職人の使命だと思っています」

高級品というイメージの強い鼈甲の眼鏡フレームだが、コストを見直し価格を抑えつつ新しいデザインを取り入れることで、鼈甲を若い人にアピールしたい、と大澤さんは言う。従来は、お客様や卸売業者の要望を受けてから眼鏡フレームを制作していたが、それに加え大澤鼈甲オリジナルの眼鏡フレームもブランド展開していくことで、より積極的に鼈甲の魅力を提案している。

「伝統というのは守っていくものではなく、その時代に合ったものを作り続けていくことだと思っています。時代と共に変わり続けなければ、どんなに素晴らしいものでも残っていくことはできません」

新しい技術を取り入れながら、今までにない鼈甲の姿に挑戦し続ける大澤さん。タイマイの甲羅を幾重にも貼り合わせて鼈甲ができるように、いくつもの挑戦を積み重ねていくことで伝統が生み出されていくと、大澤さんは信じている。



#### おおさわ けんご

大澤鼈甲株式会社 代表取締役社長。昭和31年に創業した大澤鼈甲の二代目として、伝統工芸品の鼈甲メガネ、アクセサリなどの製造販売および修理を手掛ける。オリジナルブランド「KUAI」シリーズの新品「KUAI G」（クワイ ジー）が2013年グッドデザイン賞を受賞。

